

Coleridge の詩作と政治性 ——奴隷貿易の観点から——

橋本 健 広

1780年代、1790年代に頂点を迎えた奴隷制度反対の動きは、啓蒙時代の詩人とロマン派の詩人に感銘を与え、各種の作品を生み出した主題であった。例えば、William Cowper (1731- 1800) が1788年に発表した詩 “The Negro’s Complaint” は、瞬間にイギリス全土で好評を博し、街頭で歌われていたという (*Slavery, Abolition and Emancipation* 74-77)。奴隷市場が次第に拡大し、奴隷制について人々が関心を抱き、盛んに議論が行われた社会情勢の中で、Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) もまた、1790年代に奴隷貿易に関する詩や評論を書き、講演を行った。この時期はフランス革命の影響からコールリッジの政治に対する関心が熱を帯び、コールリッジの中で詩作、詩論、宗教、哲学の問題と分かちがたく結びついて自己の才能を高めていく時期でもあった。本稿では、1790年代のコールリッジの政治的関心において、奴隷貿易への関心がどのような役割を担っていたかについて考察したい。本稿では、特に、時期的に1790年代に書かれたギリシア語の詩およびいくつかの詩、*The Watchman*の評論 “On the Slave Trade”、1795年の講演に焦点を絞りたい。テキストは、プリンストン版、ノートン版を適宜使用する。またギリシア語の詩については Anthea Morrisonが草稿から校訂し、それにJames Diggleが修正をほどこしたテキストの英訳を用いる。

1. 政治性

コールリッジの政治性は、John Morrow の区分に依拠すれば、時期ごとに五つに区別することができる。各々の時期で政治的傾向が異なる。¹ モローは、コールリッジに全般して共通する政治的傾向は、自己の意志で行動する自由行動、すなわち道徳的な自主性であるとする。本稿で扱う 1795 年前後のコールリッジの政治的立場は、特定の政党に属さず、ユニタリアンという非国教徒の立場から、フランス革命に影響を受け、国教徒の貴族や宗教関係者が形成する体制に対抗し、個人は道徳的に平等であるというキリスト教の規定に立脚して社会改革を目指す急進的キリスト教としての政治的立場であった。土地所有や商業による富によって権威や自由が築かれるという伝統的な社会構造を問題視したため、既存の宗教的機構や政治的機構および財産と政府という枠組み自体にも批判的であった。Robert Southey (1774-1843) らとともに “Pantisocracy” 「パンティソクラシー」という私有財

¹ コールリッジの政治的立場については、モローに依拠した (1-42)。

産を否定する理想的平等社会をアメリカに作る計画を立て、その計画を実現するために、講演をしたりパンフレットを作るなど、資金を調達し始めていた。この時期の後、1799年以降、コールリッジは政府と財産の必要性を説き、唯物主義の普及によって失われた商業と道徳の結合を再び試みるなど、政治的な立場を変更する。

コールリッジは、自己を“an ardent & almost life-long Denouncer of Slavery”「熱心な、ほとんど生涯を通じての奴隷制の弾劾者」であったと述べ（*Letters* 6:940）、奴隷制に反対していたが、奴隷貿易の反対に関する活動は、生涯を通じてそれほど多くはない。² コールリッジは奴隷制廃止論者 Thomas Clarkson (1760-1846) に宛てた手紙で、自己の奴隷制に対する活動の全般を述べている（III: 78）。それによると、“first public Effort”「最初の公的な努力」は1792年にケンブリッジ大学でブラウン金賞を獲得した“Ode on the Slave Trade”と題されたギリシア語の詩に始まる。³ そして手紙の中で続けて述べるように、コールリッジの奴隷貿易に対する意見は、以下のテキストに集約されている。

published a long Essay in the Watchman on the Trade in general, in
confutation of all the arguments, all of which I there stated, besides a Poem,
& several Parts of Poems (III: 78)

奴隷貿易全般に関する長文の評論を『警鐘』に載せました。議論すべてに対する論駁をそこで述べましたが、ひとつの詩と、いくつかの詩の部分は別です

コールリッジは、奴隷貿易に関して当時論じられていた奴隷制度擁護派の議論と、それに対するコールリッジの反駁を、コールリッジ自身が発行した機関紙である *The Watchman* の1796年3月25日の号に載せられた評論“On the Slave Trade”で示したという。「ひとつの詩」とは、ブラウン金賞をとったギリシア語の詩を指すと思われる。「いくつかの詩の部分」とは、プリンストン版の注で Lewis Patton が指摘するように、“Religious Musings” (139-141)、“The Destiny of Nations” (435-440)、“Ode to the Depating Year” (100-101)、“Fears in Solitude” (48-54) であると考えられる (232)。⁴ これらの詩の他に、1796年3月25日の *The Watchman* に載せられた“From an Unpublished Poem”にも奴隷制に対する記述があることを付け加えたい。この他の活動として、1795年6月16日にブリストルのキー通りにあるコーヒーハウス集会場で行われた講演、および、コールリッジがクラークソンに宛てた手紙に脚注としてつけた1798年のトーントンでの説教、またクラークソンの刊行した書籍についてコールリッジが1808年に *Edinburgh Review* に載せた書評がある。

² 本稿で扱うテキストには私訳を付す。

³ 原題はギリシア語である。

⁴ 行番号は、2001年に発行されたプリンストン版のテキストの行番号に合わせた。

このほかに、コールリッジの談話を甥の Henry Nelson Coleridge が記憶を頼りに書き集めた *Table Talk* や *Literary Remains* に奴隷制への言及が散見される (*Table Talk* 233-234; *Literary Remains* 300)。コールリッジの奴隷制に対する言及については、そのほとんどが 1790 年代に集中しているのが特徴である。1800 年代以降コールリッジの奴隷制に対する見解がほとんど見られなくなる理由は不明である。1800 年代以降コールリッジは自らの政治的立場を修正して行くが、奴隷制問題と対立する立場ではない。コールリッジは、終生変わらず人道的見地から奴隷制に反対する立場を貫いており、奴隷制にみられる奴隷の隷属的な習性を生み出したのは西欧自身であるという指摘さえ行っている (*Literary Remains* 300)。しかし公式にコールリッジの意見が示されることは 1800 年代以降ほとんどなくなる。

コールリッジの奴隷制の問題は何をもとに生じた問題だろうか。コールリッジは、1794 年の 6 月に友人の Joseph Hucks とウェールズへ徒歩旅行に出かけ、その途中オックスフォード大学に立ち寄り、そこでサウジーと知り合った。コールリッジとサウジーは政治、宗教、詩への関心など多くの点で一致していたため、すぐに意気投合し、パンティソクラシーを計画するまでいたった。7 月に入り、コールリッジとハックスは徒歩旅行に出発する。コールリッジは 7 月 6 日、サウジーと別れて間もないときにサウジーに手紙を送るが、この手紙は当時のコールリッジの政治的関心を知るのによい資料と思われる。

サウジーへの手紙には、パンティソクラシーや共有財産への言及や、貴族政治の批判が書かれている。注目したいのは、次の点である。コールリッジは、パンティソクラシーと共有財産を称揚したあと、“aspheterized”「共有財産とした」という造語に言及する (84)。⁵ コールリッジたちは当時の社会に見られなかった、共有財産という新しい制度を考えているため、それにみあう言葉がまだないのである。そこで思い切って新しい言葉を使うことを提唱し、“Similies forever!”「直喩よ、永遠なれ!」と氣勢を上げる (84)。その後続いて、旅の途中で、詩的靈感を得ると、詩才という野生の花を摘み、“inhale their odours awhile”「しばらくその香りをかぎ」、**“then throw them away and think no more of them—I will not do so!”**「花を捨ててもう考えもしません——そんなことするもんか!」とユーモアをこめて述べ、そのとき作った詩行を書く (84)。この手紙で特徴的なのは、政治に対する関心が容易に詩や言葉に対する関心に変わりうることである。コールリッジの政治に対する関心は、詩に対する関心を抜きには語れず、むしろ詩への関心が政治的関心に先行するかのようである。コールリッジはこの手紙の続きで、“**When Serpents sting, the only Remedy is—to kill the Serpent, and besmear the Wound with the Fat.**”「蛇どもが刺すとき、その唯一の療法は一刺した蛇を殺すことだ、そしてその脂肪を傷に塗りたくることだ」と述べる。為政者が圧政を強いるならば、為政者を殺し、富を民衆に分けるべきだという、著しく急進的な、君

⁵ *Oxford English Dictionary* によれば、1794 年初出の Coleridge の造語である。

主政治に対する辛らつな非難を述べる(84)。更にコールリッジはもっとよい共感を得たいだろうと呼びかけて、貴族政治に対する批判を込めた詩を手紙の続きに書き記す。また詩に対する関心が最も決定的なのは、貧困という社会情勢を生んだ既存の支配体制に対する次の非難である。“I am a Gentleman! — and wherefore should the clamorous Voice of Woe intrude upon mine Ear!?”「私は紳士だ！なぜ貧乏人の悲しみの騒々しい声が私の耳を邪魔しなければならぬのか」(83)。貧困にあえぐ少女を見てコールリッジが発する言葉であるが、この一節は Mark Akenside (1721-1770) の *Pleasures of the Imagination* の第二巻の終わりにある、為政者を非難する一節から引用された反語的な問いかけである (Jump 209)。ここではコールリッジの政治への働きかけは、まさに詩と一体化しているのである。コールリッジにとって、政治よりも、詩に対する関心の方が高かったのだろう。少なくとも、コールリッジにとっての政治的な関心は、詩への興味と深く結びついていたのである。

奴隷貿易に対する反対を詩や講演で述べる場合も、政治的な関心のみが動機となっていない。コールリッジが奴隷貿易に関するギリシア語の詩を書いた直接の理由は、ブロンズ金賞で賞を得るためにあった。“like a mad dog”「狂った犬のように」ピンダロスの詩を読み、ギリシア語の詩を書いていたと、詩を応募しようとしていたときのコールリッジの熱心な様子が、兄 George Coleridge に宛てた1791年11月初めの手紙に記されている(17)。1792年4月2日の手紙では、“I look forward to a smart contest ... I have been writing for all the prizes—namely—the Greek Ode”「ぼくはきびしいコンテストを心待ちにしている ... すなわちギリシア語の詩の賞などの、すべての賞に寄稿するために書いているところです」と、ギリシア語の詩が奴隷貿易に対する関心よりも、賞を得るために書かれたことを述べている(34)。講演と、*The Watchman* についても同様である。当時の様子を、出版者であり、詩人たちの後援者になろうとした Joseph Cottle (1770-1853) が伝えている。講演は、ブリストルに移り住み、パンティソクラシーの計画を実現するための資金集めの手段として実行された。コールリッジの奴隷貿易についての講演は、全部で六回の講演のうちの五回目で、初めの四回は当時の政府を批判するもの、六回目は、髪粉税についての講演であった(14)。これはコールリッジがブリストルで企画した最初の講演であり、コトルが自著の中で好意的に述べた記述では、数多くの聴衆がおり、好意的に受け入れられたという。このときの入場料は1シリングで、この後に企画した六回の連続講演では入場料は6シリングに上がっているため、実際に好評だった可能性はある。コールリッジは、最初の講演ということもあり、人々に受け入れられやすい議題を選んだのではないか。特に、コールリッジが当時住み、講演を行ったブリストルは、イギリスで最も奴隷貿易の取引が多く行われた町のひとつであった。⁶

⁶ 奴隷貿易への社会の関心も 1780 年代後半から急速に広まる。奴隷制廃止論者 William Wilberforce

人々に受け入れられやすい議題として、髪粉税と並んで、当時人々が関心を寄せていた奴隷貿易問題を講演の題目に選んだ可能性がある。その場合、コールリッジは政治的な信念から奴隷貿易について語ったのではなく、入場料を得て講演を成功させるために便宜的に奴隷貿易について語ったということになる。講演の草稿をみると、講演はきわめてまじめな内容であることがわかるが、単に関心の高い話題であったからという理由で奴隷貿易問題を扱った可能性は依然として残る。コールリッジの講演の仕方は、コトルが伝えるように、<自由>が<飢え>に対して書いた架空の手紙を作成して、これを読み上げるといった、聴衆が楽しんで聞けるような工夫が凝らされている。*The Watchman*は政治的信念を述べ、人々を啓蒙することを目的として書かれたが、結婚した後に安定した収入のなかったコールリッジにとって、日々の収入を得るための意図が少なからずあったことは予想される。

このように、急進的な改革の思想をもっていたコールリッジだが、奴隷貿易の問題は必ずしも政治的信念のみから活動を行ったわけではなかったと考えられる。コールリッジの政治的関心にとって、奴隷貿易の問題は、少なくとも中心的な主題ではなかったといえるだろう。そこで、奴隷制の問題を、サウジーに宛てた手紙の中で政治と文学がまざりあっていたことから、詩作との関わりの中で考えたい。

2. 評論と講演

コールリッジの行った評論と講演から、コールリッジの奴隷貿易問題にみられる特徴と、コールリッジの当時の政治性との関係を考察したい。

1796年3月25日の*The Watchman*に載せられた評論“On the Slave Trade”は、1795年6月16日に行われた講演を要約し、修正を加えて書かれた評論である。⁷ この評論でコールリッジは奴隷貿易の廃止を訴えるが、その根拠を宗教的倫理に求めている。初めにコールリッジは、人間の悪を生み出すものが、“imaginary Wants”「想像上の必需品」であると述べる(288)。ノートン版の注において、奴隷貿易に関する講演の中で、想像力は、理性に属する心の高みを求める一段と拡大した役割を持っているものの、奴隷貿易で得られる品物のように“unreal Wants”「ありもしない必需品」を作り出すために誤って使用されるものとコールリッジがとらえていることが示唆されている(288)。*The Watchman*の評論でも、悪は人の知的行為を刺激し、想像力を誤って用いらせ、奴隷貿易で本質的に必要のないものを輸入に必要な道具や衣類を輸出する。またそこから慈悲が生じるが、それは利己的なものであることを示唆する。

(1759-1833)は1788年から毎年奴隷制廃止法案を議会に提出した。奴隷制廃止法案は1807年に通過したが実効をとまわず、最終的に実効をとまらぬ奴隷制廃止法案が施行されたのは、コールリッジの晩年に近い1833年である。

⁷ 評論“On the Slave Trade”については、ノートン版のテキストを参照した(288-299)。

コールリッジは奴隷貿易の擁護論者の反論を予測し、同じく廃止を唱えるクラークソンの論に依拠し、奴隷貿易を擁護する側の論点を五つにまとめ、それぞれに反駁を加えて、廃止の必要性を強化する。コールリッジの反駁の要点は、奴隷貿易を擁護する意見の背後には、利益を得る者の策略があるということであろう。当時一般にいわれていた奴隷貿易に関するさまざまな具体的事実も、利益を得る者の意図に沿って組みかえられた事実すぎないとし、コールリッジは具体的事実修正を加える。1. イギリスのみが奴隷貿易を廃止しても、他の国家が奴隷貿易を行うので、廃止に意味がないという擁護論に対しては、奴隷貿易で利益を得る立場にある議員が、既得の権利を手放すまいとして述べる論理であると反駁する。2. 奴隷となる黒人は植民地で生活する方が幸福であるという擁護論に対しては、幸福であれば増えるはずの植民地の黒人の人口が増加していないこと、本来奴隷ではない黒人を、西欧の奴隷商人が、現地の有力者に賄賂を渡したり酒に酔わせたりして、奴隷として買っていること、黒人は祖国で自給自足の生活を送っており、無垢で幸福であることという実情を述べて反駁する。また具体例は挙げないものの、黒人が普段使用する日用品のよさから黒人に高い知性があることを述べ、奴隷貿易の擁護者が唱える黒人に対する誤解を緩和する。3. 国家の歳入が著しい損失をこうむるという擁護論に対しては、西インド諸島との貿易がむしろ赤字であるかもしれない可能性を述べる。4. 財産権の侵害であるという擁護論に対しては、土地その他の財産が減るわけではなく、人を強制的に働かせる行為ができなくなるだけと述べる。また誰にも殺人を犯したり他人の存在を妨げる権利はないと、現在の人権である生存権に近い意見も述べる。5. 廃止は時期尚早であるという擁護論に対しては、議会が交易上の腐敗を隠すためのみせかけの手段にすぎないと述べ、議会や王侯貴族への批判を述べる。フランスや当時の首相 William Pitt (1759-1806) を揶揄し、議会が奴隷貿易を廃止しない理由を、当時の議会政治において多数派が首相の意のままであるという民主主義の危険性にみる。

奴隷貿易の擁護論者の論旨に対し、当時の政治と奴隷貿易の意図的な策略を示した上で、コールリッジは一転して宗教的倫理に訴える。誘拐されて奴隷にされ、植民地に送られる奴隷が、殺されたり、移送中に亡くなったり、現地の環境に適応できず亡くなる事例を述べた上で、死者の数は“ONE HUNDRED and EIGHTY MILLION”「一億八千万」にもものぼると訴える(296)。この罪の責任を誰に求めるべきか。コールリッジはこの原因を、奴隷商人や、現地の有力者ではなく、市井の人々が奴隷貿易で生じる産物を消費することに求め、消費者に罪があると示唆する。

次にコールリッジは、廃止に向けて具体的な対応策を述べる。砂糖とラム酒の放棄である。廃止を請願して大騒ぎしなくても、人々が砂糖とラム酒を消費するのを控えれば、不要な労役が減り、奴隷貿易は終了するという論であり、ノートン版の注に拠れば、当時すでに何人もの廃止論者がこの説を唱えていた(297)。砂糖を使用するということは、奴隷の血

によって得られた食物を供するということであり、コールリッジは宗教的倫理からこれを非難する。⁸ 砂糖を食することに悪意を感じないという誤った偽りの感受性が、度重なる戦争と奴隷貿易の存続の原因なのである。身の回りで行われる奴隷売買という元凶は認識していても、奴隷の血と労役によって生産される嗜好品を享受することには何ら罪の意識を感じないことが最大の原因であるという。“She sips a beverage sweetened with human blood” 「上品な淑女は、人の血で甘みをつけられた飲み物を飲む」という残酷な行為を行いながらも、それと気づかずに、目の前にある、Johann Wolfgang von Goethe (1749-1832) や Samuel Richardson (1689-1761) の美しい小説に涙を浮かべる、とカリカチュアのような揶揄を述べる。(298)。そして、コールリッジは感受性と慈悲は異なるものであることを述べる。慈悲は行動を促し、無私の心とともににあるのである、と行動の必要性と宗教的倫理の強調を述べる。

コールリッジの評論で一貫して語られる奴隷貿易反対の論拠は、宗教的倫理にそぐわないという見解である。またクラークソンその他の、当時の一般的な奴隷制廃止論者の数々の見解を取り入れつつ、コールリッジ自身の視点として、奴隷貿易という悪が生じる原因を、想像力が誤って用いられ、想像上の必需品を生み出すことに求めている。また奴隷貿易によって得られた品物を消費することは奴隷の血でできた品物を消費することと同じであり、目の前の害悪に気づかないでいることが罪であるとしている。これらの視点は、人々を啓蒙し、人々を普段気がつかないが実際に存在している悪に気づかせ、覚醒した民衆による改革を成功させるという目的に沿っている。このプロセスは、コールリッジのこの時期の政治性の特徴と一致する。

この評論から判断できることは、コールリッジの奴隷貿易に対する関心にみられる特徴が、当時の思考の枠組みに収まっているかに見えながらも、実は超越しているという事実である。コールリッジの奴隷に関する言及は、具体的な数字も黒人の文化風習も含め、すべて書物から得た知識である。Edward W. Said (1935-2003) は、*Orientalism* の中で、西欧が東洋を他者として区別し、西欧自身は優越的な位置に置きつつ、自分たちとは異質な未知の東洋を、実際には西欧自身の姿の裏返しでしかないものの、言葉や図式によって理解可能にしようと試みたとする (1・73)。イギリスや西欧の諸国が、奴隷として連れてこられる黒人を理解可能なものにしようと様々な記述を試み、図式化しようとしたのである。当時の詩や書物に書かれた黒人についての記述は、簡素に描かれ、型にはまっていた (*Slavery, Abolition and Emancipation* x)。そして書物や図像や図式化された記述を通して、西欧自身が作り上げた想像上の東洋の姿が強化されてゆく (*Orientalism* 74・113)。コールリッジ

⁸ 奴隷の血によって得られた砂糖については、カルチュラル・スタディーズの観点から、様々な議論がなされている。Timothy Morton. *The Poetics of Spice: Romantic Consumerism and the Exotic*. Cambridge: Cambridge UP, 2000. 171-206.

も、サイドがオリエンタリストと呼ぶ種類の人の例にもれず、書物を通して黒人や奴隷貿易についての知識を蓄えている。コールリッジの詩や評論に、生身の黒人の声は見当たらない。コールリッジはおそらく黒人と会話していないのであろう。だがコールリッジの場合、他の詩人と異なり当時の思考の枠組みを超えていると思われる箇所がある。人は他人を殺す権利を持っているだろうか、と黒人の人権を主張している箇所である(293)。当時の奴隷制廃止運動は、人権問題から生じたものではなく、哀れみと宗教的倫理から生じたもので、極端な場合には奴隷貿易は反対するが奴隷制は反対しない場合もあった。コールリッジは黒人の人権に関するような記述をしているが、理性による直観を重視し、想像力を働かせるコールリッジの思考方法に、既存の枠組みを超える道筋が存在した可能性がある。ただし、*Table Talk* にみられるように、晩年のコールリッジは黒人の解放に否定的だったようである(233-234)。また、砂糖とラム酒を控えるという具体的な実践を説く講演活動も特徴的である。

3. 奴隷貿易に関する詩

コールリッジの政治性に詩とのかかわりが深いと先に述べたが、ここでは詩がどの程度コールリッジの政治的な見解に関わっているか考察してみたい。

「奴隷貿易に関するギリシア語の詩」は、ブラウン金賞への応募作品として、ギリシア語で書かれた詩である。サッフォー風のギリシア詩という応募条件を満たすため、コールリッジは古代ギリシア語のレスボスのアイオリス方言で詩を書いた。“**the ideas are better than the language in which they are conveyed**”「意味される言語や韻律よりも、観念」が大切であるという、作詩についての付記を“*The Destiny of Nations*”の注にみることができる(297)。これはコールリッジがギリシア語の方言や韻律に自信がなかったからではなく、想像力を重視した見解を述べているのであると思われる。ギリシア語の詩には、間違いが134例もあるという指摘があるが、ディグルによれば疑わしいものをすべて含めても134例にはるかに及ばず、134例というのは悪意ある中傷と考えられている(34-35)。

詩の中で、語り手は<死>に奴隷である黒人の下に早くやってきてほしいと呼びかける。<死>により黒人の魂は祖国へ戻り、恋人と話をすることができるため、<死>は喜んで迎え入れられるのである。そして植民地での過酷な労働と恐ろしい生活が語られる。黒人たちは、言語に絶する嘆きでうめき苦しみ、労苦の渦の中を旋回する。熱、疾患、疲弊が黒人の体を蝕むが、鞭で打たれて労役せざるを得ない。目を閉じて、恐怖は眠らない。夢で美しい幻影を見ても、暴力の苦痛は黒人たちを狂気に駆り立てる。奴隷制の悪を享楽し、同胞の血を奪う子供たちを見て見ぬふりをすることはできない。下の地位にある者は怒りを抱くことになる。そのとき、堅琴の美しく甘い歌声が聞こえてきて、哀れみの使者であるウィルバーフォースが現れて言う。「涙は十分な量に達した。いまや、災いは滅び、もはや奴隷制は

続かない。祖国から遠くはなれて無駄な労役につくことはなくなる。いまの奴隷たちが耐え抜いたおかげで、その子供たちは正義を味わい、自由を集める」、と。こうした言葉を風は運んだ。愛は、善行の翼とともに黒人たちをたたえる。美德のお供である詩神は、絶えず黒人たちのことを思い出す。受難者への祝福とともに、黒人たちの名は天に捧げられる。

ギリシア語の詩は 1792 年に書かれたものであるが、1795 年の奴隷貿易の評論で述べられるいくつかの論旨がすでに見られる。

O you who revel in the evils of Slavery, O you
who feed on the persecution of the wretched,
wanton children of Excess, snatching your
brother's blood, does not an inescapable Eye
behold this? Does not Nemesis brandish fire-breathing
requital? (45-51)

ああ、奴隷制の悪徳を享楽するものよ、ああ、
同胞の血をかつさう、行き過ぎた乱暴をはたらく
奔放な子供たちに、
疲弊したものの迫害を糧として与えるものよ、
まぬがれない目は、このことを見ていないというのか
人間の思い上がりを憤り罰する女神ネメシスは
火を噴く復讐を振りかざさないというのか⁹

「奴隷制の悪徳を享楽するもの」とは植民地貿易で得られた資源を消費する一般の人々を指す。一般の人々が資源を消費することで、「奔放な子供たち」という奴隷貿易の商人たちが、「疲弊したものの迫害」すなわち奴隷を貿易し、使役に従事させる理由を与えるのである。この引用では、奴隷貿易による産物が、奴隷の血によって作られていることを暗示し、そうした産物をほしいままに享受する一般の人々の無意識な行いの内に、残虐な行為が潜んでいることが明らかにされている。罪は、奴隷貿易の商人にあるのではなく、奴隷の血によって作られた産物を消費する者にあることが指摘されている。更に、罪は世俗を超えたところで判断されるため、まぬがれることはできない。こうした奴隷貿易による産物を消費することの罪、および道徳的な罪は、後の奴隷貿易に関する評論の主張の中心をなすものである。コールリッジがまだ若い時期に詩作の中で形成した観念が、後の政治的評論で形を成したと

⁹ ギリシア語で書かれた詩については、モリソンが草稿から校訂し、それにディグルが修正をほどこしたテキストの英訳を用いる。

考えることができるだろう。詩作の中で形成された詩的イメージが、後に政治的作品や活動において展開されたのである。

またこの詩では、もうひとつの重要な特徴がある。William Lisle Bowles (1762-1850) によって書かれた詩、“The African” (1791) からの影響が見られることである。モリソンはコールリッジの詩と類似するボウルズの詩を数点挙げている。ボウルズの詩では、仲間の奴隷が、怪我をして息絶えた奴隷を見て歓喜する。奴隷は死ぬと潮にのって、家族が生活し、美しい自然の残る故郷の土地へ戻されるからだ。故郷で再びカヌーに乗り、槍を携え、奴隷が植民地で受けた傷や厳しい苦悶を恋人に語ることができる。もはや暴君はいなく、さげすまれたり憎まれることもない。仲間は、息絶えた奴隷に、自分たちが植民地でなんとかやっていることを、他の人に伝えてほしいと頼む。死ぬと黒人の魂は故郷に戻り、家族や親しい人たちと語り合うというこの詩的イメージは、コールリッジのギリシア語の詩で用いられている。たとえば、ボウルズの詩にみられる、“Tell to thy long-forsaken love / The wounds, the agony severe, / Thy patient spirit suffer’d here!” 「長く会わなかった恋人に話しなさい、きみの忍耐強い霊がこちらで受けた傷や厳しい苦悶を!」(40-42) という一節は、コールリッジのギリシア語の詩にみられる同内容の一節では、“lovers to tell their / beloved what terrible things, being men, / they suffered from men.” 「恋人たちは、愛するものに、人々から、人としてなんと恐ろしい仕打ちを受けたか語る」(15-17) となる。コールリッジは、当時ボウルズに傾倒し、詩作の手本としていたため、ボウルズの“The African”を読んでいたことは疑いないだろう。コールリッジは、ボウルズの詩から感銘を受けた印象深い詩的イメージを自己の詩に取り入れたのである。これは、ボウルズの詩に限ったことだろうか。ボウルズはコールリッジが特に影響を受けていた詩人の一人であるが、その他にもクーパーやチャタトンなど、同様にコールリッジが影響を受けていた詩人がこの時期奴隷制に関する詩を数多く書いていた。それらはみな奴隷の悲惨な運命を嘆き、奴隷制に反対する内容の詩であった。コールリッジの奴隷制に反対する立場は、ギリシア語の詩に見られるように、この時期にすでに明確に築かれていた。そこにはコールリッジ自身の道徳的な信条が含まれるとはいえ、コールリッジの奴隷制に反対する立場は、少なくとも一部は当時の詩作品に影響を受けて形成されたと考えられるだろう。

先に、コールリッジの詩作の中で形成された詩的イメージがコールリッジの政治的著作の中で展開された特徴を指摘したが、最初に詩作の中で形成されたその詩的イメージも、実は他の詩作品から感銘を受けて取り入れたものだったのである。すなわち、コールリッジの政治的信条は、1790年代当時流布していた詩から影響を受けて展開された部分があるといえる。

先行詩人の詩作品をもとに形成されたコールリッジの政治的信条は、更にコールリッジ自身の後の詩作において利用されている。例えば、黒人の霊が亡くなると故郷に戻って再び

生活するというイメージは、1796 年前後に書かれたコールリッジの “The Destiny of Nations” で再び取り上げられる。

As when the mad Tornado bellows through
The guilty islands of the western main,
What time departing for their native shores,
Eboe, or Koromantyn's plain of Palms,
The infuriate spirits of the Murdered make
Fierce merriment, and vengeance ask of Heaven. (435-440)

西の海原の罪深き島々を通して
狂ったようなたつまきがうなり声を上げて吹くときのように
椰子の茂るイーバウあるいはコロマンティンの、
故郷の海辺へ向かって進みながら、
殺されたものの激昂した霊たちが、
恐ろしげな騒ぎをし、天の復讐を求めるときのように¹⁰

コールリッジはこの一節に自ら注をつけている。“The Slaves in the West-Indies consider death as a passport to their native country” 「西インド諸島の奴隷たちは死を祖国へのパスポートと考えている」と述べ、祖国の地を離れ植民地で亡くなった黒人の霊が集い騒いでいる情景であることを示している。ここにはふたつの詩の機能が認められるだろう。ひとつは、椰子の茂るイーバウやコロマンティンの海辺など、当時のイギリス人にはほとんど未知の、異国の具体的な固有名詞を使用して強い詩的イメージを喚起させる詩の機能である。もうひとつは、コールリッジが以前に他の詩人の作品から影響を受け、政治的信条を形成したように、強い詩的イメージを作り上げることで、詩を読む読者に奴隷制に反対する意識を植え付ける詩の機能である。コールリッジの 1790 年代の政治的活動は、改革を達成するために、人々を啓蒙する手段をとるという方法をとっていた。ここでは、詩作品を通して人々に悪を訴え啓蒙する姿勢が読み取れる。コールリッジは、二回目の政治講演の題目に、“Literature: its Revolutionary powers” 「文学とその革命的な力」を挙げている (Cottle 17)。講演の様子は伝えられておらず、題目のみしか知ることにはできないが、詩の革命的な力について述べているはずである。詩行が、読者の人々に働きかけ、世論を形成する力を持つことを論じるつもりであったのではないか。コールリッジは、黒人に関する知識を、ボウルズの詩から得るとともに、その力強い詩的イメージを使用して、詩の創作に役立てるとと

¹⁰ プリンストン版以外のテキストでは、“departing for” は “departing from” となっている。

もに、奴隷貿易に反対する意識を読者に与えているといえる。

この詩行の後、自由を求めて立ち上がった太陽は、血に染まって立ち上がる。天が圧制を、あるいは西欧の国家に復讐を行う暗喩である。非常に力強く印象的な詩的イメージによって、読むものは圧制と抑圧されるものとの間の軋轢を感じずにいられない。1792 年の時点では、コールリッジは政治的な奴隷貿易に関するギリシア語の詩を書くために、ボウルズの詩に描かれた詩的イメージを利用したが、講演後の 1796 年前後の段階では、今度はその詩的イメージがコールリッジの政治的な詩を書くための道具となって、政治的な意識を啓蒙するために利用されたのである。

だが、奴隷貿易について、あるいは奴隷制について、書物からの知識しかなかったコールリッジが、力強い詩的イメージを詩作の中で展開することができたのはなぜか。得られる情報は限られていたとはいえ、コールリッジは David Hartley (1705-1757) 等のイギリス経験論を吸収し、自らの問題として哲学上の問題を展開することで、はからずも当時の思考の枠組みを踏み越え、当時ではあまり考えられなかった黒人の人権に関する問題などを展開し、力強い詩的イメージを獲得したのではないか。

奴隷貿易に関する問題は、コールリッジの政治性の一部が他の詩人の詩作品から形成されたことを示すとともに、奴隷貿易に関する問題が当時の思考の枠組みを越えて詩作の中で展開されることで、人々を啓蒙する手段としても利用されたのである。

上記の考察から、詩作において生じた奴隷制に対する観念が、コールリッジの奴隷貿易に関する政治的関心の一部を形成し、また奴隷貿易に関する政治的関心が詩のイメージを形成するのに役立つことを見た。奴隷貿易の問題は、具体的な数字や風習や図式を含むため、詩作および政治における実践として展開されやすい。コールリッジの、1790 年代の政治性から、奴隷貿易の問題をとらえたとき、他の宗教的、政治的、哲学的な事例と異なり、奴隷貿易の問題は具体性に富むため、社会の改革を目指し人々を啓蒙するという過程の中で、具体性をともなう実践の一部として利用することが可能であったという特徴を見ることができ、奴隷貿易の問題は、具体的な事実を含むために、社会情勢の推移の影響を受けやすく、奴隷貿易の議論の頂点を過ぎた 1800 年以降、コールリッジの政治的関心に符合せず、言及されることが少なくなったとはいえ、奴隷貿易の問題は、実践的な方面で、コールリッジの政治性の一部を形成したのである。

Works Cited

- Coleridge, Samuel Taylor. *Coleridge's Poetry and Prose*. A Norton Critical Edition. Eds. Nicholas Halmi, et al. New York: Norton, 2004.
- . *Collected Letters of Samuel Taylor Coleridge*. Vol. I, III. Ed. E. L. Griggs. Oxford: Clarendon, 1956.

- . *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Lectures 1795: On Politics and Religion*. Eds. Lewes Patton and Peter Mann. Bollingen Series LXXV. Cambridge: Routledge & Kegan Paul, 1971.
- . *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, 16, Poetical Works, I, Poems (Reading Text), Part 1*. Ed. J. C. C. Mays. Bollington Series LXXV. New Jersey: Princeton UP, 2001.
- . *The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge: Table Talk, Vol. 2*. Ed. Carl Woodring. Bollingen Series LXXV. New Jersey: Princeton UP, 1990.
- . *The Literary Remains of Samuel Taylor Coleridge*. Vol. 1. Ed. Henry Nelson Coleridge. 1836. New York: AMS Press, 1967.
- Cottle, Joseph. *Reminiscences of Samuel Taylor Coleridge T and Robert Southey*. 1847. Highgate: Lime Tree Bower, 1970.
- Diggle, James. "Coleridge's Greek Ode on the Slave Trade." *Notes and Queries*, 49 (2002). 31-35.
- Jump, Harriet Devine "High Sentiments of Liberty : Coleridge's Unacknowledged Debt to Akenside." *Studies in Romanticism*, 28(1989). 207-224.
- Morrison, Anthea. "Samuel Taylor Coleridge's Greek Prize Ode on the Slave Trade." Ed. J. R. Watson. *An Infinite Complexity: Essays in Romanticism*. Edinburgh: Edinburgh UP, 1983. 145-160.
- Morrow, John. *Coleridge's Political Thought: Property, Morality, and the Limits of Traditional Discourse*. Basingstoke: Macmillan, 1990.
- Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford UP, 1989. CD-ROM. 2002.
- Slavery, Abolition and Emancipation: Writings in the British Romantic Period*. Vol. 4. Ed. Alan Richardson London: Pickering & Chatto, 1999.
- サイード, エドワード・W. 『オリエンタリズム』 (板垣雄三, 杉田英明監修. 今沢紀子訳. 東京: 平凡社, 1986).